

観 立 日

平成4年3月

第16号
年2回発行
発集発行

広島県安芸郡府中町
茂陰2丁目2-8-10
真言宗 正観寺

小出真行

「女性は長生き？」

不思議なもので、百才を超えます長命のほとんどが女性です。男性は一家の大黒柱で生活負担で苦勞が多いとか、日常身の回りのことが出来ないとか、生理的な構造だとよくいわれています。本当は

「寺に法要があり参詣する人は

女性が圧倒的に多く

男性より精神修養の機会が多い

ゆえに、女性のほうが長命」

つまり、仏さまや神さまと、『ともに生きようとする心』にご加護があらわれ、日常での健康の留意とうまくマッチし長命をいただけるのではないのでしょうか。さてはともあれ、誰だって長生きしたいものですね。



正観寺 観音大祭 柴燈護摩の弓作法

「位牌とは」

「位牌」とは別名「霊牌」と申しまして、亡くなった人の戒名（法名）を記して、お仏壇におまつりする、いわば故人のシンボルに当たるものです。（表面に戒名（法名）裏面に、没年月日、俗名、年令等を書きますが、真言宗では、戒名の上に諸仏の種子を悉墨で書き、諸仏に霊が救われる意を現わします。）

もともと、「位牌」は中国で用いられていました。古くは神さまを祀るとき、金属製の板に神名を書いて祭壇に安置したので、儒教では後漢（二〜三世紀）ごろから長さ十〜四十センチの坂に在命中の官位や姓名を記して神霊に託される習慣を仏教が依用したものです。わが国へは、禅宗を伴って伝わり、江戸時代に祖先崇拜の思想と密接に連がり、一般化したようです。

「位牌」の大きさ、形状は種々で、蓮台のついたものが多い様ですが、この「位牌」を大きく分けまして、白木造りの野位牌と、黒塗り、朱塗り、金箔塗の本位牌があります。白木の野位牌は、葬式の時祭壇に安置し、墓所にも持って行きます。しかし、死

後四十九日まで、塗りの本位牌をつくらず忌明けからは本位牌をお仏壇におまつりして長く供養いたします。

本位牌は、各家庭のお仏壇におまつりしますので内位牌とも呼ばれますが、これに對しまして、お寺にあずけて永年供養してもらう「位牌」を、寺位牌と言います。普通の「位牌」は、一札ずつ立てる造りとなつていますが、くりだし位牌といって、一つの位牌に何枚かの板片を入れ、それぞれに戒名を記しておくものもあります。現在では、屋根や扉の付いた豪華なものも多く見かけます。

さて、お仏壇にあまり多くの位牌が並んだ場合、お供養してから処分してもよいことになっておりますので、五十回忌が過ぎれば祖霊に合祀されると考えてもよいでしょう。

本位牌を、新たにお仏壇におまつりするときは、開眼法要とか点眼法要といって、入魂の法要を営むことになっていきます。どうぞ、『仏作って魂入れず』になりませぬように！



七福神

私が帰広して毎年、旧の初寅の日に緑井にあります、毘沙門さん（広島島の三大毘沙門の一つで、他に比治山の多聞院、海田の大師寺があります）に助法に行きますが、前年度より内護摩も焚くようになり参拝者も増え二日間で約三万〜四万人の信者さんが福を求めてお参りにこられます。

この本尊でありますところの毘沙門天は皆さんもご存知の七福神の一神として深く信仰されています。この七福神は『仁王護国般若波羅蜜經』の「受持品」にある、

「講ニ読般若波羅蜜、七難即滅、七福即生」

（般若波羅蜜ヲ講読スレバ、七難即チ滅シ、七福即チ生ジ）

という記述をよりどころとしまして、それまで個々別々に信仰されてきました神々がまとめられ、室町時代に成立したといわれています。しかし、庶民の間に定着しましたのは江戸時代になってからのようです。江戸時代のはじめ、徳川家康の相談役でありました天海僧上が鎮護国家、天下泰平を祈念し、七福神信仰の普及を勧めたこと

がきっかけとなって七福神信仰は全国に広まったといわれています。その後、時代を経て庶民の信仰を集め、長く巡拝の対象となってきました。

さて、この七福神は

- ① 恵比須
- ② 大黒天
- ③ 毘沙門天
- ④ 弁財天
- ⑤ 福祿寿
- ⑥ 寿老人
- ⑦ 布袋

の七神ですが、これは江戸時代後期に成り立したものです。それ以前といいますと、寿老人の代わりに狸々という動物が入っていたようですが、もちろん想像上の動物で、人面人足、長髪で人語を解し、酒を好むとされています。空想の動物が七福神の一神となっていた理由はわかりませんが、寿老人が除かれたわけは、実は福祿寿と寿老人は同体異音といわれており、そのため、福祿寿が二神を代表したとも思われます。同様の理由から、福祿寿と寿老人を南極老人と呼んで一神と数え、吉祥天を七福神の一神として入れる場合もあったようです。
やおよろず
八百万の神々をもつといわれています。日本は、インドで生まれた仏教を受容し、中国の道教や儒教も受け入れていたようです。さてこの神々の出身地ですが

インド出身く大黒天、毘沙門天、弁財天
吉祥天

中国出身く福祿寿、寿老人（または合

わせて南極老人）、布袋

日本出身く大黒天、恵比須

となっていて、ここで大黒天がインドと日本の両方にあげられている点にお気づきでしょうか。これは、インドの神、マハーカール（大黒天）と日本の神、大国主命が習合され成立した神だからのようです。

この中で仏教に関連する神々を数えてみますと、大黒天、毘沙門天、弁財天、吉祥天、布袋和尚と圧倒的に多く、複合宗教の観を呈します。七福神信仰ですが、根強く仏教の信仰に支えられていることがうかがえます。

では、この七福神のそれぞれの概要を申し上げますと

① 恵比須

「恵比須」は「夷」い「戒」かいなども表記されており、風折烏帽子に狩衣・指貫を着け、釣りざおと鯛を持った姿で、伊弉諾いさなのみことと伊弉冉命いさのみのみことの間に産まれた蛭子尊ひるこのみことだといわれています。幼い頃葦舟に乗せられて海に流され、舟は摂津国西宮の浦に流れ着き、

蛭子尊はそこでまつられて恵比須神となつたといわれています。このように漂着神の観があります。恵比須神は、はじめは漁業の神でありましたが、後には大黒天と並んで商売繁盛の神となりました。

② 大黒天

インド名を「マハーカール」といい、「このマハー」は「大」「カール」は「黒」の意味でして、ヒンズー教の破壊神シヴァの別名とされています。それが日本に入ってきたとして大国主命と習合し、独特の大黒天となったのです。つまり「大黒」は「大国」「だいこく」に通じるところから習合がなされ、破壊神は福德円満の神に変わつたといわれています。

③ 毘沙門天

別名を多聞天といい、持国天、増長天、広日天とともに仏法を守護する四天王のひとつで、甲冑に身を固めた姿（緑井の毘沙門天は天の邪鬼を踏んでいます）からわかりますように、毘沙門天は勝軍の神として信仰され、足利尊氏が上杉謙信が守り本尊としていた話がよく知られています。

その軍師が、後には財宝富貴自在の福利を授けてくれます。福神として庶民に信仰さ

れるようになりました。

④ へ弁財天

数少ない女神で、七福神の中で紅一点です。もとはインドの河川神であります。サラスヴァティー女神からきています。

弁財天が湖や海辺の岩屋に安置されていますのは、どうやら出身が河川神であったからのようです。

弁財天は学問、学芸の神であり、音楽の神ともされ、その姿は琵琶を手にしているところから、いつのまにか福德財物の神とされるようになりました。ただし、弁財天は嫉妬深い神ともいわれ、アベックでお参りすると別れることにもなりかねるといいますのでどうぞご注意を。

⑤ へ福祿寿

背が低く頭の長い福祿寿は、鶴と亀を促して人間の寿命をつかさどる神です。

⑥ へ寿老人

普通の老人の姿をしており、千五百歳を越えた鹿を連れていまして、長寿とともに智恵の神です。

⑦ へ布袋

布袋和尚は実在の人物で名を契比かいしといいます。小柄ですが大きなお腹をし、いつも

半裸で杖を持ち背に大きな袋を担ぎ、諸所を転々としていたといわれ、吉凶の矛盾に優れていました。後に未来の世で仏となって人を救う弥勒菩薩の化身と教えられるようにもなったようです。

へ吉祥天

寿老人を除いた場合に入られますのが吉祥天で、インド神話に登場する、宇宙の維持神ヴィシュヌ神の妃で、日本に入ってくる毘沙門天の妻とされました。なぜかわかりませんがそれほど美しい女神だったらしいのです。この吉祥天は財物を授ける女神として信仰されていましたが、鎌倉以降になりますと弁財天にとって代わられて信仰が下火になったといわれています。

このような概要の持ち主の七福神は、「現世利益」の是否にもかかわらず、庶民のご利益に対する希求は時代を超えて組織化されて今日にいたったようです。



平成四年度の主な行事

一月 一日	三日	修正会
二月 三日		星祭
三月 八日		観音大祭
三月廿七日	三十日	小豆島巡拜
五月廿五日	廿九日	四国霊場巡拜
七月 二日	三日	石鎚山参拜
八月廿四日		地藏祭り
十二月卅一日		年越祭り
毎月十八日		月並観音供
毎週金曜日		御詠歌練習

昨年度は、台風による塩害で随分不自由な思いをされた方もおられることと思ひます。天変地異は本当に恐いものです。

備えあれば患い無し
どうぞ、日頃から気を付けましょう。

